

名古屋の発展を支えた「縁の下の力持ち」(1)

－名古屋市上水道110年の足跡－

■名古屋の近代上水道事始め

日本の近代上水道の創始は、1887(明治20)年、コレラなどの伝染病対策として敷設された横浜水道である。1883年に来日した英国人工兵将校のヘンリー・S. パーマーの指導の下、日本人技術者の協力を得て、神奈川県は日本初の近代水道を横浜に完成させた。パーマーは、大阪、東京、神戸などの水道計画に関わり、近代水道の基礎を築いた。これを契機に明治政府は、1890(明治23)年に水道条例を制定した。

名古屋市は、1893(明治26)年、地下水の水質悪化と火災頻発の対応策として、水道建設を決意し、内務省衛生局顧問の技師ウィリアム・K. パルトン(英)に水道布設の調査を委嘱した。パルトンの計画案は、水源は入鹿池、総工費は175万円であった。名古屋市の年間収入10万円をはるかに上回り、水道布設は見送られた。

1902(明治35)年、愛知県技師上田敏郎に上水道布設計画の作成を委嘱した。上田は、水量豊富で良好な水質の木曽川からの引水を提案し、1908(明治41)年、上水道の布設が認可された。目論見書によると、給水区域は名古屋市、1人/日の最大給水量は110リットル、給水人口は46万人であった。

■鍋屋上野浄水場の完成と給水開始

上田敏郎は、1903(明治36)年に名古屋市議会に水道布設に関する調査報告書を提出したが、日露戦争で審議未了となり、1906(明治39)年に「上下水道敷設施行ノ件」の議案は予算も含めて可決された。上田は、報告に基づき、犬山町(現犬山市)から木曽川の水を引き、鍋屋上野浄水場でろ過した水を第1ポンプ所から愛知郡東山村の山頂の配水池に圧送し、各戸に配水する計画を立てた。工事は、1910(明治43)年に着工、1914(大正3)年から給水を開始した。浄水場の緩速ろ過方式は、名水を生み、現在も利用されている。また、第1



〔写真1〕現在の鍋屋上野浄水場の緩速ろ過池 2008/06/01 筆者撮影



〔写真2〕鍋屋上野浄水場旧第1ポンプ所 2005/07/08 筆者撮影



〔写真3〕第1ポンプ所のポンプ室、国産のみのくち式渦巻ポンプ採用の先駆けとなった。 2005/07/08 筆者撮影

■東山配水塔(給水塔)の建設(パネル1-(3)を参照)

名古屋市の東部千種町、田代町の丘陵地帯は、住宅地として発展が目覚ましかった。居住者の激増により水圧が不足し、衛生及び防火の両面から不安があった。そのため、1925(大正14)年、名古屋市の第3期拡張事業の一部を変更して、東山配水場構内に配水塔を築造することとなり、1930(昭和5)年3月、東山配水塔は名古屋市初の高架水槽として竣工した。

■稲葉地配水塔の建設(パネル1-(4)を参照)

1933(昭和8)年、水道使用量は人口増加と生活の向上により年々増加し、従前の人口100万人分を150万人分として需要に適した施設が求められた。名古屋市は、第4期拡張事業で、名古屋駅西部方面の水圧低下を防ぐために稲葉地配水塔の築造することとなり、1934(昭和9)年認可された。

配水塔は、当初の円筒形配水塔の設計案を変更して、外周16本の円柱と輪壁で約4000トンの水槽を支える構造とした。古代ギリシャ神殿風の外観の稲葉地配水塔は、1937(昭和12)年5月に竣工した。